

# 馬 高 遺 跡

—スペースネオトピア関連道路に伴う確認調査報告書—

1991

長岡市教育委員会

## 序

長岡市では、現在、旧長岡ニュータウン東住区にスペースネオトピア（宇宙博物館）の建設を計画しています。スペースネオトピアとは、「宇宙に学ぶ・遊ぶ」という基本理念を通して、これから迎える21世紀の宇宙時代を生きる人々に「啓蒙・教育の場」、さらに「想像・体験・コミュニケーションする場」を提供するテーマパークであり、その建設運営を中心に、総合的な地域振興を行なうものです。この事業を進める中で、国指定史跡「馬高遺跡」の近接地に道路計画が予定されていることから、このたびの確認調査を実施しました。

調査にあたり、多大な御指導・御協力をいただきました文化庁、新潟県教育委員会、関原土地改良区ほか関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

## 例 言

1. 本書は新潟県長岡市関原町1丁目字中原に所在する馬高遺跡の確認調査報告である。
2. 調査はスペースネオトピア関連道路計画に伴う事前調査であり、長岡市教育委員会が主体となって、1990年10月12日～31日に実施した。
3. 遺物整理、図版作成および本書執筆・編集は、小熊博史が担当した。なお、図版作成には背沼亘（新潟大学人文学部大学院生）・広井造（同人文学部学生）両氏の協力を得た。
4. 本調査出土遺物の注記は「UT-S」とし、グリッド名等を記した。

## 目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	2
3. 調査の経過	3
4. 調査の結果	3
(1)調査区の概要	3
(2)出土遺物	6
(3)隣接区域の遺物分布	8
5. まとめ	9
調査体制、調査に御指導、 御協力いただいた方々、 機関	奥付

## 1. 調査に至る経緯（図1）

長岡市では、21世紀を展望したまちづくりの拠点施設として、県・市および佐藤工業等民間企業が参画した第三セクターによるスペースネオトピア（宇宙博物館）の建設を旧長岡ニュータウン東住区（約220ha）に計画している。その一部は平成7年度開園の予定である。この一連の事業を推進する中で、国道8号線からスペースネオトピアへ通じる道路を計画、これが周知の馬高遺跡の東側縁辺部に隣接するため、開発にあたっては事前に確認調査を行なう必要が生じた。長岡市教育委員会では、事業主である長岡市（関連各課）および新潟県教育委員会文化行政課と協議の上、道路計画に関連する区域（約31,950m<sup>2</sup>）を対象に調査を実施することにした。

馬高遺跡は、縄文時代中期の大規模な集落遺跡、また「火炬土器」が出土した遺跡として著名である。1979年2月には西側の三十畳場遺跡とともに国指定史跡となり、「火炬土器」は1990年6月に重要文化財の指定を受けている。史跡指定の範囲は、1972年に実施された長岡市教育委員会のボーリング調査（中村1973）に基づくものであり、遺跡中心部を含むほぼ全域がカバーされていると考えられるが、今回の調査ではその周辺にも遺跡が広がっている可能性も考慮した。なお、調査にあたっては、事前に地元説明会を行ない、関原土地改良区および地主・耕作者から同意を得ている。



図1 遺跡の位置と地形（1:10,000地形図）

## 2. 遺跡の位置と環境（図1・2）

馬高遺跡は、新潟県長岡市の西部、信濃川左岸に形成された関原丘陵（関原段丘面）上に立地する。「馬高」は当地域の通称名で、現在の所在地は関原町1丁目字中原である。標高は約60m、遺跡の広がりは東西約200m、南北約300mに及ぶと推測され、そのうち約25,000m<sup>2</sup>の範囲が国指定史跡となっている。現況は平坦な畑地で、南後方には糠山の丘陵が延び、西側には沢を挟んで三十稻場遺跡（縄文時代後期）がある。

遺跡の調査・研究の歴史は古く、明治時代からすでにその存在は知られていた。特に1935（昭和10）年から数年間にわたる、地元関原の素封家近藤家の勘治郎・篤三郎氏の発掘調査・研究（近藤1936）によって多量の資料が収集されている。その経緯、内容については中村孝三郎氏の詳細な研究（中村1958、1966）があり、「火炬土器」の遺跡として著名となった。また1972年には長岡市教育委員会によるボーリング調査が実施され、炉跡の残存状況や遺物の分布など遺跡に関する詳細なデータが得られた（中村1973）。その後、1979年に隣接の三十稻場遺跡とともに国指定史跡となり、現在に至っている。

関原丘陵およびその周辺には、縄文時代の遺跡が数多く分布する（図2）。馬高・三十稻場遺跡と晚期の大規模な集落跡である藤橋遺跡の他は、中期・後期の小規模な遺跡で、丘陵縁辺部側に偏った分布傾向を示している。



図2 周辺の遺跡（国土土地理院発行 1:25,000信濃川周辺図を1:50,000に縮小、ドットは縄文時代の遺跡のみ）

1大曾場 2下里城 3猪俣 4谷内 5火垂り坂 6瀬野堂 7宮本 8糸割 9三の橋 10久右衛門清水 11鏡音山  
12糠山 13城山 14藤田山 15三十稻場 16糸高 17上の穴 18赤岡寺山 19軒堂 20南原 21新村 22松山 23基塙

### 3. 調査の経過

調査は、1990年10月12日から10月31日までの期間（20日間）実施した。10月12日に調査に必要な機材を搬入、10月16日には発掘区（グリッド=G）を設定し、発掘作業を開始した。調査区内を南北に通る農道に沿って基本軸を定め、それに直交するライン上にグリッドを設けた。便宜上、調査区全体を南北および東西の農道によって、I～III一西・東の6ブロックに大別してある。グリッドは $2 \times 4\text{ m}$ を基本に設定、一部状況に応じて拡張している。またI区西は指定区域と境界を接するため、グリッドを多めに設定した。

発掘作業は、ほぼI区西・III区西→II区西・II区東→I区東・III区東の順で実施、I区西とIII区西のタバコ作付の畑地については、土壌消毒の都合上、優先的に作業を進めた。各グリッドについては、地山面まで掘り下げ、遺構の有無、遺物の出土状況、堆積土層などを確認、写真撮影等の記録後、順次埋め戻し作業を行なった。

10月30日には埋め戻し完了、10月31日に機材を撤収して調査を終了した。なお、10月30・31日には指定区域南側に隣接する畑地の分布調査も併せて実施している。

### 4. 調査の結果

#### （1）調査区の概要（図3・4）

調査区内に設定したグリッドは計65か所。15のグリッドで遺物が出土したが、住居跡・土塙などの遺構は皆無であった。グリッド別の遺物出土点数および内訳は表1に示した。

基本的な堆積層序は、I層=黒褐色土（耕作土）、II層=暗褐色土、III層=黄褐色土（地山）である。遺物はI層およびII層から出土している。以下、各地区別に概要を述べる。

I区西 23か所を調査。そのうち、1・2・3・5・7・16・17・51・52・62Gの計10グリッドから遺物が出土した（62Gは近世のカワラケ片1点のみ）。いずれも指定区域との境界に接するグリッドである。指定区域境界付近は土層の堆積状況も良好で、地山面までの堆積も厚い（約50～70cm）。特に2・5・7・10GではII層が細分され、II<sub>1</sub>層=褐色土、II<sub>2</sub>層=暗褐色土、が認められる。一方、東側は堆積が稀薄で、地山表面まで耕作の影響を受けている。なお、5・16・17Gでは、部分的に倒木痕が確認された。

I区東 7か所を調査。堆積層厚は35cm程度とほぼ均一だが、II層は地山粒の混入が多いため緻密でなく、土質は良好

表1 出土遺物の内訳

調査区・ グリッド	出土遺物（点数）	
	遺文土器	その他
I	1	1
2	52	磨製石刀1、磨石類3、塊石2
3	2	フライク4、磨石類1、塊石1
5	5	磨石類1
7	49	磨石類3
16	15	磨石類1、磨石類1、塊石1
17	2	塊石1
51	42	フライク1
52	15	磨石類1
52		カワラケ1
I区 東	56	1
55		カワラケ1
59		カワラケ1
II区 東	20	1
西	34	1
計	386	磨製石刀1、磨石類11、 塊石類1、フライク5、 塊石5、カワラケ13

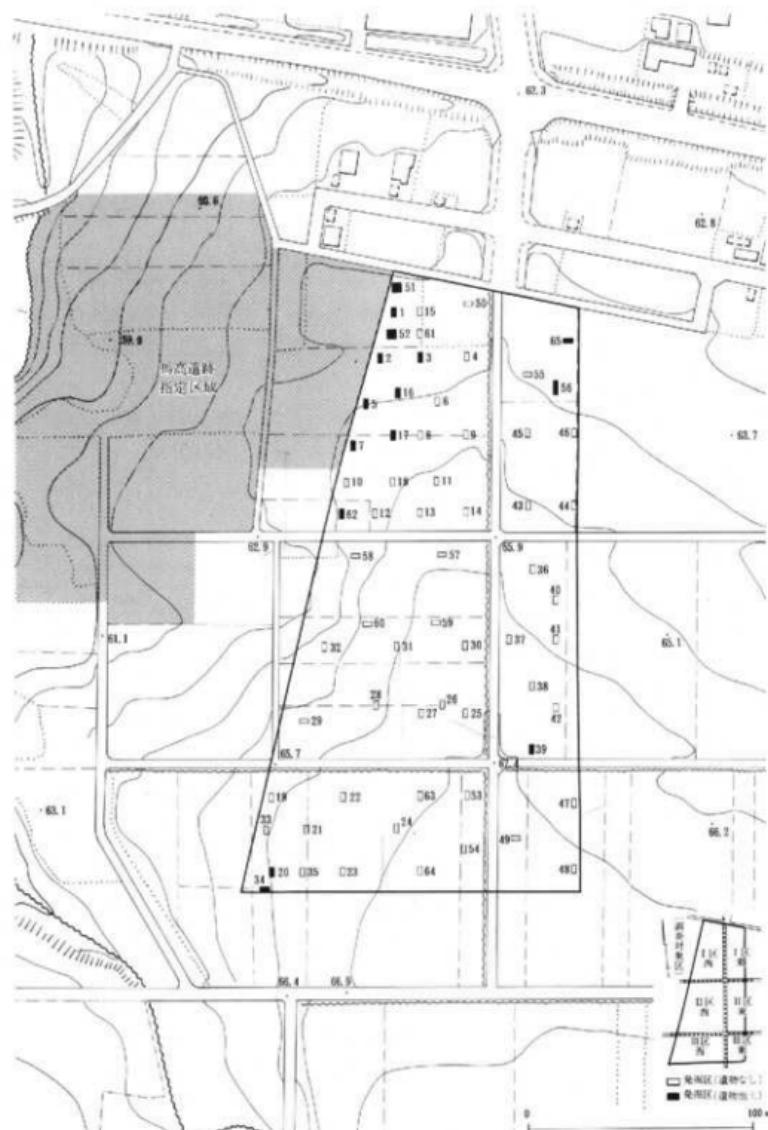


図3 調査区全体図 (国土基本図1:2,500をもとに作成、発掘区の各番号はグリッドの番号を示す)

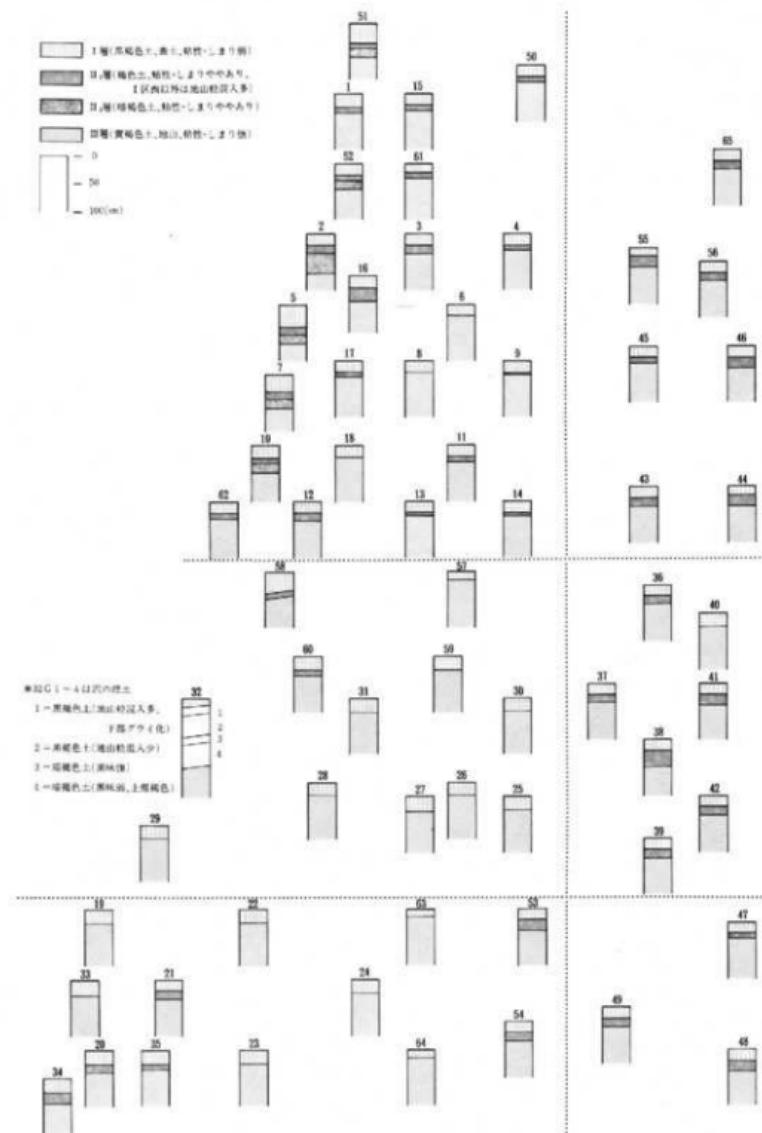


図4 土層模式図（各番号はグリッドの番号を示す）

ではない。少量の遺物が56・65Gから出土している（65Gはカワラケ片1点のみ）が、土層の堆積状況から、耕作土の移動によるものと考えられる。

**II区西** 12か所を調査。そのほとんどのグリッドは耕作土（I層）のみで、層厚も稀薄である。32・58G付近には、現地形や等高線からも明らかのように、さらに西側から延びる小規模の沢が入り込んでいる。土層全体が西側に傾き、堆積も厚い。特に32Gは土地改良事業の際、数次にわたって埋め立てた痕跡を明瞭に残す。58Gは沢の上がり部分に相当する。いずれのグリッドからも遺物は出土しなかった。

**II区東** 7か所を調査。堆積層厚はほぼ均一だが、土層の性状はI区東と同様、良好ではない。遺物は39Gでカワラケ片1点が出土しただけで、その他では出土しなかった。

**III区西** 13か所を調査。西側の調査区境界付近は堆積が比較的良好で、20・34Gから遺物が出土している。東側の堆積状況は不良で、地山表面まで耕作の影響を受けている。指定区域から距離がかなり離れているにもかかわらず、当区域から遺物が出土したことについては、後述する隣接区域の分布状況から指定区域とは別の広がりを示すものと考えられる。

**III区東** 3か所を調査。堆積の状況はI区東・II区東とほぼ同じ。遺物は出土しなかった。

## (2)出土遺物（図5）

出土した遺物は、縄文土器片186点、石器13点などがあるが、量的には少ない（土器は総重量約2,500g）。I～II層から出土、そのほとんどが縄文時代中期に属する資料と考えられる。グリッド別の点数は表1に示したとおり。以下、代表的な資料を図示・記載する。

土器は縄文施文のみの細片が多く、時期の詳細の判明する資料は極めて少ない。1～3は隆起線によるモチーフをもつ。1は口縁部片、2・3は胴部片。いわゆる「火焔形土器」の範疇に属するもので、中期中葉の大木8a式に並行する。4は口縁部無文帶直下に、刻目を加えた隆帯が巡り、中期末に比定される。5は半截竹管の区画沈線に縄文を充填するもので、中期前葉の新崎式新段階に位置づけられる。6～9は斜行縄文が施される胴部片。10は木目状撚糸文、中期初頭大木7a式に特徴的な文様である。11は底部片で、底面に網代の痕跡を残す。12は竹管沈線と縄文が認められる中期前葉の資料。13は縄文。14は竹管沈線と連続爪形文が施されるもので中期前葉、15は隆起線文の口縁部で中期中葉、16は竹管沈線間を縄文で充填するもので中期前葉に、それぞれ比定できる。17・18は斜行縄文の胴部片である。

石器には、磨製石斧1点、砾石錐1点、磨石類11点（うち1点のみ図示）がある。19は定角式の磨製石斧。基部は欠損。残存部最大長6.88cm、幅5.02cm、厚1.95cm。刃部には使用痕の小剥離が認められる。20は両面中央部に敲打によるくぼみをもつ磨石で、側縁付近の一部にミガキ面を残す。長2.28cm、幅7.38cm、厚4.65cm。21は両端を数回打ち欠いただけの砾石錐。剥離は右側縁から加えている。長8.10cm、幅8.48cm、厚3.70cm。

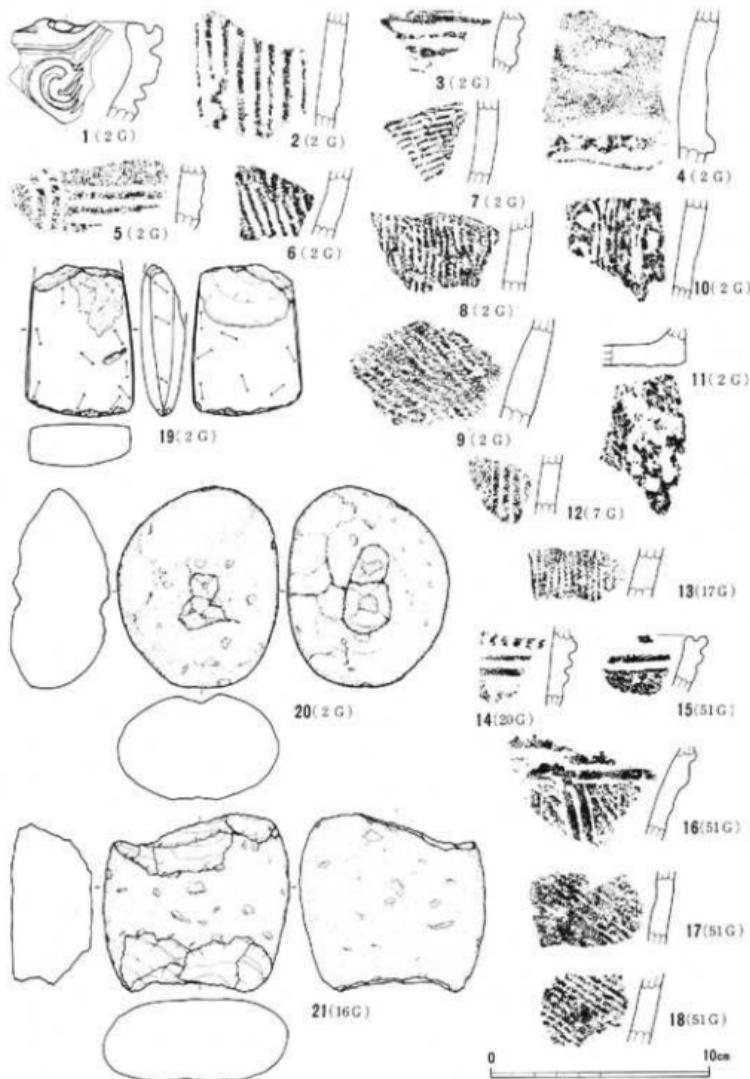


図5 出土遺物(番号右のカッコ内は出土グリッドを示す)

### (3)隣接区域の遺物分布(図6)

III区西の西南端部に設定した20・34Gで、各1点ではあるが遺物が出土し、またグリッドの周辺にも稀薄ながら遺物の散布が認められた。この状況はII区西の小規模の沢を挟んで指定区域とは異なる別の広がりを示している可能性も考えられることから、調査区のさらに西側および指定区域の南側に隣接する部分について、遺物の分布調査を行なった。

調査は、図6に示した①～⑧の区画に分けて実施。①は沢底地形の最もレヴェルの低い地区、②～④は北側(沢側)に緩く傾き、⑤～⑧はほぼ平坦である。その結果、①～⑧のすべての区域で遺物が採集された。その内訳は表2のとおりで、大部分は縄文時代中期の土器片と考えられる。特に①～④の範囲には遺物が多い。①にはさらに北側の畑地同様、沢を埋め立てた時の土がかなり混在している。②・③の土壤は黒味の強い色調を呈し、堆積状況は良好と考えられる。⑤は地山に近い色調で、表層部が削平されているか流れ去ってしまった可能性が高い。

全体的に耕作によって畑表面の上が移動していることもあり、その範囲・規模などの詳細は不明瞭だが、後述のボーリング調査

表2 採集遺物の内訳

分査調査 の区域	採取遺物(点数)	
	縄文土器	その他
①	30	陶石片4
②	86	磨製石斧片1、石錐1、 フライク1、陶石片15
③	123	フライク1、陶石片5
④	15	陶石片3
⑤	8	陶石片1
⑥	9	陶石片2
⑦	10	
⑧	12	
計	281	磨製石斧片1、石錐1、 フライク2、陶石片35

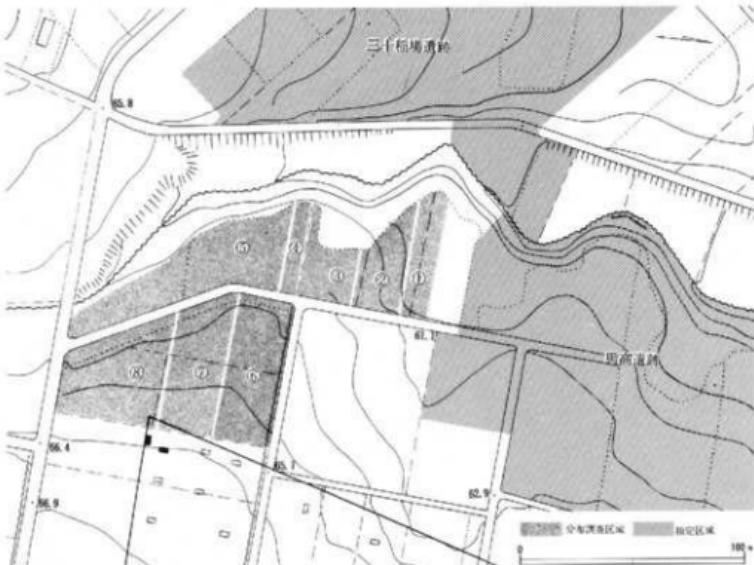


図6 隣接区域の遺物分布調査(国土基本図1:2,500をもとに作成)

の結果からも明らかのように、沢を挟んで南側にも遺跡が広がっていることは確実であり、今回の出土状況もその関連でとらえることができる。

## 5.まとめ

馬高遺跡東側縁部を対象とした今回の調査の結果は、次のようにまとめられよう。

①調査対象地内に計65か所のグリッド（基本 $2 \times 4$  m）を設定、うち15か所で遺物が出土したが、構造は全く検出されなかった。

②遺物出土のグリッドは、指定区域との境界付近（I区西の西側）に集中する。また土層の堆積状況も同域付近が比較的良好である。

③遺物のはほとんどは縄文時代中期の土器片で、量的には僅少であった。また細片のため時期の判明する資料は少ない。

④指定区域の南側付近から小規模の沢が東方に延びている。本調査II区西でも埋没した沢の状況が確認された。

⑤III区西の西南端のグリッドで出土した遺物については、隣接区域の遺物分布などから、稀薄ながら（上記の沢を挟んで）指定区域とは別の広がりを示していると考えられる。

馬高遺跡については、1972年に長岡市教育委員会が実施したボーリング調査の成果がある



図7 長岡市教育委員会による1972年のボーリング調査結果  
(中村1973をもとに作成、破線は今回の調査対象域)

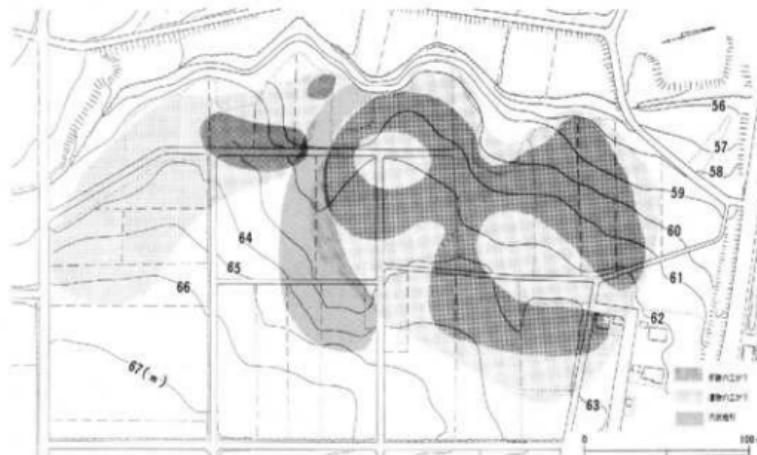


図8 馬高遺跡の広がり(国土基本図1:2,500をもとに作成)

(中村1973)。調査では46,325m<sup>2</sup>に及ぶ範囲を対象に実施、範囲を1,853区画(1区画=5×5m)に分けて、ボーリング棒による炉跡の検索、遺物の分布状況など詳細に記録している。推定された「配石炉址」は81基、すでに湮滅していた「配石炉址」25基を合わせると計106基となる。炉跡は2群が連結した馬蹄形状に展開、遺物分布の集中域もその周辺に広がっている(図7)。この様相を今回の調査結果と総合してみると、指定区域東側については、遺物が少量出土しただけで遺構は未検出の状況であり、ボーリング調査の結果とは合致する。ただ指定区域南側については、小規模の沢を挟んでの広がりが、三十稲場遺跡との境のやや規模の大きい沢の縁辺に沿ってさらに延びている可能性が高い。また小規模の沢は位置的に土器捨て場として機能していたことも考えられる。

ボーリング調査および今回の調査から想定される遺跡の広がりは図8に示した。遺跡中心部に比べ周辺域については、全体的に土地改良や耕作等によって土壤が移動していることもあり、不明瞭な部分もある。今後の調査によっては、さらに具体的にとらえることが可能であろう。

#### 引用・参考文献

- 近藤勘治郎・篤三郎 1936 「越後馬高遺跡と滑車形耳飾」(『考古学』第7卷10号)
- 中村孝三郎 1958 『馬高』(長岡市立科学博物館)
- 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』(長岡市立科学博物館)
- 中村孝三郎 1973 『馬高・三十稲場遺跡緊急調査報告書』(長岡市教育委員会)



①調査対象区遠景(北側から、右後方は鶴山)



②調査対象区近景( I 区西、南東から)



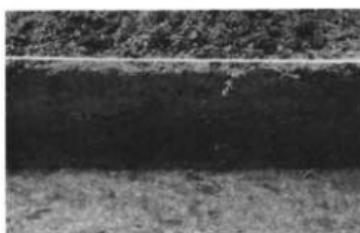
③発掘作業(52G)



④埋めもどし作業(56G)



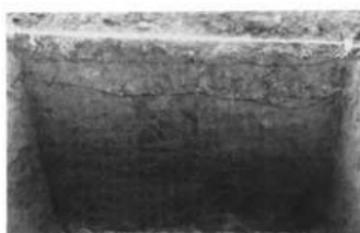
⑤ I 区西 2 G 完掘状況(南側から)



⑥ 2 G 土層断面(西壁)

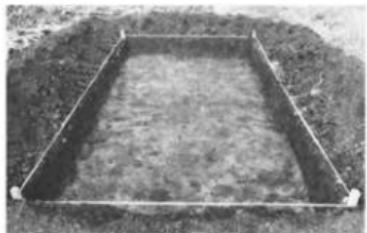


⑦ II 区西32 G 完掘状況(北側から)



⑧32 G 土層断面(南壁)

図版2



⑩I区東65G 完掘状況（東側から）



⑪II区東42G 完掘状況（南側から）



⑫III区西24G 完掘状況（南側から）



⑬III区東49G 完掘状況（西側から）



⑭I区西51G 遺物出土状況（土器片）



⑮II区西に残る沼状地形（東側から）



⑯出土遺物

## 調査体制

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）

調査担当 小熊博史（社会教育課職員）

調査作業員 宮本町内会有志

調査事務局 木宮 敦（社会教育課長）、清水正一（同課長補佐）、  
鈴木孝行（同課副主幹）、駒形敏朗、佐山美智子、  
笠原敏和、小林伸治（同課職員）

## 調査に御指導・御協力いただいた方々・機関

金垣孝二、坂井秀弥、関原土地改良区、長岡市企画調整部企画課、  
中島栄一、新潟県教育庁文化行政課、廣野耕造（五十音順、敬称  
略）

馬 高 遺 跡

ースペースネオトビア関連  
道路に伴う確認調査報告書—

平成3年3月29日印刷

平成3年3月29日発行

発行：長岡市教育委員会

（新潟県長岡市辛町2丁目1番1号）

印刷：㈱中越

（新潟県長岡市学校町3丁目9番5号）